

文献紹介

Spitz 母斑のダーモスコピー所見とその管理

良性腫瘍である Spitz 母斑と悪性黒色腫はいずれも Spitz 様の臨床像やダーモスコピー所見を呈するため、臨床的な鑑別や管理に関して臨床医の中でいまだに議論が分かれている。加えて、組織学的に Spitz 母斑か悪性黒色腫か診断できない腫瘍 (atypical Spitz tumour: AST) も存在する。本研究は Spitz 母斑のダーモスコピー所見の分類を最新化し、Spitz 様病変の管理方法を提案することを目的とした。

Spitz 母斑のダーモスコピー所見について述べられた 15 の文献を分析した結果、Spitz 母斑のパターンは色、構造が左右対称であり、主なダーモスコピー所見は starburst pattern (51%)、規則的な dotted vessels (19%)、網状脱色素を伴う globular pattern (17%) であった。Spitz 様病変の中で年齢が高い場合や、結節性病変の場合に悪性黒色腫である確率が上がることも示された。すなわち、左右対称性の Spitz 様病変が悪性黒色腫である確率は 12 歳未満ではきわめて稀なのに対し 12 歳以上 30 歳未満では 7%、50 歳以上では

50% と上昇した。さらに、平坦病変では 12% であるのに対し結節性病変では 32% であった。

これらの結果を踏まえ、Spitz 様病変を管理するアルゴリズムが提案された。まず、左右非対称の病変は悪性黒色腫を除外するために切除が推奨される。左右対称な病変であっても結節性病変は AST を除外するために切除あるいは慎重な観察が望まれる。左右対称で平坦な病変においては年齢によって対応が変わり、12 歳未満では経過観察、12 歳以上では切除が推奨されている。

Lallas A, et al: Update on dermoscopy of Spitz/Reed naevi and management guidelines by the International Dermoscopy Society. Br J Dermatol 177:645-655, 2017

(慶應義塾大学 太田 志野)